

月刊反トマホーク通信

No. 47
89.9.20
定価 100円

〒150 東京都渋谷区渋谷2-5-9 パル青山1502 トマ喰い虫社 ☎03(498)6095 044(63)5101 FAX.044(63)9907
郵便振替 東京0-136148



「核疑惑艦は帰れ」とシュプレヒコールを繰り返す被爆者、市民、労組員たち
＝松が枝ふ頭入り口＝

写真はいずれも「長崎新聞」から(本文も)

核疑惑に包まれたまま長崎に初寄港する米海軍フリゲート艦「ロードニー・M・テイビス」
＝15日午前10時前、松が枝国際観光ふ頭沖＝

●抗議！

核艦船、被爆地・長崎へ入港

●海上自衛隊が米原子力空母と共同演習 (PACEX)

●三沢からの報告

●平壤一板門店訪問記

●フィリピンの基地に核兵器

トマホークの配備を許すな！全国運動

●維持会員(月間会費)

団体 1口 2000円
個人 1口 1000円

●参加会員(月間会費)

団体 1口 1000円
個人 1口 500円

●通信会員

年間 1口
2000円

あなたも仲間！(会費は本誌購読料を含みます)



晴れ間をつき、海上デモをする反核運動のメンバー

8. 27核まみれの日本はごめんだヨコスカ行動

この日横須賀は嵐の中。呉、京都、首都圏そして横須賀から集まったモーターボート、ヨット、ゴムボート合計17隻。風雨が止んだわずかな合間に平和船団が海上デモ。この後、基地前を通るデモには200人が参加した。

太平洋演習 (P.A.C.E.X)

海自と米原子力空母二隻が共同演習へ

カールビンソン/エンタープライズ

「太平洋演習(P.A.C.E.X)」が九月一日に始まった。参加国はカナダ、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、韓国は未定。これだけは確認されている。しかし、演習の全体像は依然として霧の中である。それでも、国際的な平和運動ネットワークの連携や各国のメディアの追跡によって、すこしずつだが、重要な情報が伝えられ始めている。

● ●
九月五日、「海の軍備撤廃を」太平洋運動」は、渡米中の反トマ全国運動のコーディネーター梅林さんも加わりシアトルで記

(一三ページへ)

抗議!

長崎への第二の核攻撃

市民の怒り/市長のがんばり

九月十五日午前十時、核搭載可能な米国のミサイルフリゲート艦「ロッドニー・M・ディビス」が被爆者、市民そして市長の反対の声を押し切って長崎に入港した。人々の心を土足で踏みつけにした、被爆地への「核ならし攻撃」に心の底からの怒りと悲しみを感じる。

長崎市は七四年に当時の諸谷市長が核保有国の軍艦入港拒否を言明、市議会も「核搭載艦艇の入港拒否に関する意見書」を採択している。また今年三月には「非核市民憲章」が議会決議され、さらに八月九日には「長崎平和宣言」で非核の法制化、アジア太平洋の非核化を訴えたばかりである。

長崎には八六年に海難救援艦ビュフォード、八七年には貨物艦セントルイスが入港、戦闘艦では六七年の巡洋艦セントルイス以来二十二年ぶりである。「彼らのねらいは明らかです」と市民団体「ピースバス長崎」の細川正義さん。「段階を踏んでエスカレートしているんです。次はトマホーク艦がやってくるにちがいない。「長崎の『核アレルギー』をつぶせば、どこの港でもうまくいくと彼らは考えているんです」。

十二日に入港が発表されると被爆者、市民団体、労働組合はただちに入港阻止の行動を始めた。「ピースバス」も他の七団体とともに市、県への申し入れ、米大統領への抗議電、



連影を抱いて抗議する被爆者たち

チラシ配布などを行い、入港日には被爆者や労働者とともに座り込みに加わった。

● ●
本島長崎市長は、この市民の声を背にきっぱりと「入港反対」を表明し、自治体の長としては最大限といってよい行動をおこした。市長は在福岡アメリカ領事館に次のような要望書を送った。「親善のため入港するのであれば、核兵器を積載してはいないという証明書を提出していただくよう強く要求いたします」。そして市民の疑惑が解消されないと

ぎり、「被爆都市の市長としては長崎港への入港については強く反対いたします」。さらに市長は長崎港の港湾管理者で(六ページへ)

タイコンデロガの「航海日誌」外務省受け取り拒否

神奈川県が提出

「神奈川を非核にする県民運動」は八月三十一日、空母タイコンデロガの公開日誌を神奈川県に提出、事故の真相糾明を再度国に迫るよう求めた。

九月四日、県は外務省に出向き、これを提出して真相糾明を要請したが、外務省は受け取りそのものを拒否した(九月十六日「神奈川新聞」「中国新聞」)。「日誌の有無を含めて米大使館を通して米政府に照会中。米国に事実確認を頼んだ以上、米国からの回答を待つのが外交のルール」というのが外務省の説明にならない説明である。

県は「事実確認のすべてを米国に任せるのではなく、資料入手など自主努力も必要ではないか」と、いつも住民に言われているセリフを繰り返した。住民自治体一団、この三すくみ状態を突破する世論の盛り上がりがいかにつくられるのか。「次の一手」を見つけない。詳しくは次号で。

(神奈川を非核にする県民運動)

三沢から

伊東裕希

「北斗新報」発行人・三沢市

三沢基地の現状を報告するが、残念ながら「闘いの報告」ができない事を前もって断っておきたい。社共や労組レベルの年一〜二回の恒例の集会、デモ以外は見るべき闘いや住民組織が皆無と云ってよいのが二十年の三沢の実状だ。

約二十年前といえば平連系の反戦スナック「アウル」を中心に反戦闘争がそれなりに盛り上がり、市内の青年労働者にも一定の影響を与えた時期もあった。それから二十年、客観的には三沢市は「基地との共存共栄路線」に何らの変更なく走り続けてきた歴史ともいえる。しかし、八五年夏のF16配備の始まりから87年夏で五十機の配備完了で飛躍的に強化された基地が生み出す「基地公害」の激化にさすがの住民も「これ以上の基地強化は御免だ」との動きを見せ始めている。

ともかく今は核燃で頭も手も一杯でも、そもそもいつていられないほど基地もたいへんなことになってるのだ

「半身」の理由

これを書いている本人も三沢の住民でありながら何となく他人事風に報告する内情をまづ明らかにしておこう。

生まれも育ちも同じ青森県内だが三沢市民となつてまだ六年余。タブロイド版四ページの『北斗新報』なる月三回発行の『豆新聞』を一人で出し、一家五人が食っている。約千部の部数で三沢市中心の「商業紙」で、二十年の紙歴を持つ。ほくが三沢に移つたものこの新聞を創業者から引き継ぐため、革新色は鮮明にしつつも、読者の大半は商店主や役所関係など保守層でしめ、食っていきけるだけの市民権は得ている。



米軍三沢のF16

一昨年夏、F16配備完了後は三沢基地の機能は一変した。

ず核燃を片づけてから、というのが僕も含めた仲間達の気持ちなのだが、それも言つてられない程、基地の動きも矢継ぎ早だ。というわけで、あくまでも半身に構えた「三沢基地レポート」にならざるを得ない。

いつか大惨事が

五月十七日、三沢の夜は一変した。市民には寝耳に水のNLP(夜間離発着訓練)が開始されたからだ。五月は結局二十四日まで断続的な轟音に夜の十時まで基地周辺は包まれた。三沢市や県もさすがに「NLP絶対反対」を即座に表明はしたものの、八月に入り九日〜十日、十六日〜十七日とNLPは実施され、厚木の代替としてのNLP恒常基地のねらいは誰の目にも明らかとなった。

三沢ではミッドウェーの横須賀母港化と同時に年一〜二回の割りでNLPは行われ、八六年十一月を最後にここ二年余はなかったものの初体験ではない。しかし今回の住民の反応は鋭く、以前の比ではない。この二〜三年の状況の変化が大きいからだ。まずF16の五十機配備、日常的な騒音の増大が前提としてあった。騒音直下の太平洋岸最大の集落・四川目(よつぐみ)が集団移転を迫られ、三



今年8月の三沢まつり

日米友好、国際都市ミサワを売りものに、米軍からも例年大挙して祭りに参加し、基地との「共存共栄」の一大イベントが。

百戸近い村が個人移転も含めて消えようとしているのが象徴的だ。

そして相次ぐ墜落、緊急着陸、誤射、誤爆の連続。八七年三月のF16八戸沖墜落から始まり、八八年九月のF16岩手山中墜落まで、一年半で自衛隊機も含め五件六機の墜落事故が続出し、乗員六名が死亡している異常さだ。他にF16の緊急着陸がこの一年内で四件。そして六ヶ所村内で、核燃予定地に近い地点への模擬弾誤射が二件と、いずれも人家には被害がなかったものの事故が日常化し、大惨事は時間の問題という状態である。

いわゆる全共闘世代で四十一才、当時東京で染まったクセは未だ抜けず、この十年余の「本業」は反原発・反核燃の闘い。周知のようになが「下北半島」は今、「原子力半島」化への道を進んでいる。原子力船「むつ」、東通原発、大間原発、そして六ヶ所村の核燃施設。まずこれを止める事が最大の課題と、「基地問題」は見えて見ぬフリをしてきたのが偽らざる心境だ。

なかでも核燃問題は今や県政の最重要課題となり、その建設是非をめぐる攻防は頂点に登りつめようとしている。「基地問題」はま

こういう中でのNLPの登場なのだ。三沢市は基地行政の基本を「基地との共存共栄」を図ることと公言し、「基地公害」の見返りに銭を引き出すことで街の「発展」をはかる「基地の街」として、戦後の人口一万の寒村から四万人の市になった。戦後の人口増のすべては基地関連といっても過言ではない。それだけに市の経済も政治も、文化も「基地依存」であることには変わりがない。

四万人の中には空自三千人、家族四千人の七千人が自衛隊関係であり、他に米軍人六千人、家族六千人の一万二千人の外国人が住む「国際都市」。就任一年半の自民党・鈴木市長の市政キャッチ・フレーズが「安らぎと潤いのある国際色豊かな文化都市」の建設だ。「安らぎと潤い」を求めたい気持ちにはわかるが、現実はずっと遠のくのみである。

市民の広がりやを大事に

「NLPは市としても絶対反対。何が何でも許すわけにはいかない」と、市長も議会でブチあげた。基地周辺の二十町内会を組織する三沢基地進入表面下町内会連合会は九月二十四日に十一年ぶりの集会を計画し、NLPの絶対反対を決議する予定だ。しかし、基地

問題での唯一の住民組織ともいえるこの連合会は未だ官製の域を脱しきれず、市基地対策課が事実上の事務局を担う形になっている事から、行政の物取り闘争に結果的に利用される組織でしかないのが現実。我々としては当面この組織の下からの再編と強化が重要な課題と考えているが、その前にまず自前の「たたかう組織」の旗上げが必要だろう。



八四・六・十
社会党、県評が主催したF16反対集会とデモ。年に一度位はゲート前でこんな光景もみられるのだが：

核燃をかかげた農民代表の三上隆雄氏が社会党の推薦を受け、保守二候補との事実上の三覇戦に圧勝したのだが、ここ三沢でもトップの得票を得るといって「棒事」が発生した。自民党や行政のいいなりにならない層が、とりわけ農村部の若手を中心に着実に生まれてきている証明だろう。

●二ページからつづく●
ある長崎県知事にたいして、非核証明書の提出を在日米国公館から提出させる「神戸方式」を採用するよう要請した。

また、市長はデイベイス号の艦長からの表敬訪問を「核を積んでいるかどうかを聞き、市民の感情を説明する」(九月十六日「朝日」)ために受け入れたが、平和公園での献花への同行は拒否した。

だが、アメリカは「非核証明提出」の要求を無視し、県も受け入れの方針を変えなかった。入港の朝、長崎港では、被爆者、市民、労働者三〇〇人が抗議行動。翌十六日、艦長らが献花のためおとすれた平和公園でも被爆者らが座り込み、長崎原爆被災者協議会の山口仙二会長らは花輪を踏みつけて抗議した。「『ここではたくさんの方が熱線で焼き殺さ

ている。市の総面積の約五分の一を占め、今や完全に北の要塞化し、巨大化した基地の撤去へ向けた闘いは容易ではないことは十分承知の上で、それでもなお自民党市長をして「これ以上の基地強化は認められない」といわせる程の「基地の街」に対し、「このままでは大変なことになる」と感じ始めた市民の広がりや大事にすることから再スタートするしかないだろう。

れた。核兵器を積んできて献花しにくるとは何事か。遺族は泣いている。この花輪を踏み付けてやる」と言い、後は言葉がでない。(九月十七日「長崎新聞」)。

細川さんは「艦長らには『平和公園に入るな』と言って欲しかったが、市長は精一杯がんばった。前回(八六、七年)米軍艦を受け入れた時から、昨年の『天皇の戦争責任発言』、そして今回、市長は変わったし強くなった」と市長の姿勢を評価する。今後、非核三原則をめぐる攻防は各地で自治体を当事者としながら激しさを増すだろう。「市民の非核世論をしっかりと作るための日常的な活動を強めていく。これに尽きる」(細川さん)。そう、長崎でも、どこの町でも…。(編集部)

「説得力」欠く新防衛白書

— 追い詰められた軍拡の論理 —

すびりつと

第八回

全国運動情報センター

青木進彦(京都市)

9月12日、89年版の「防衛白書」が閣議了承された。日本の「防衛白書」は76年以来毎年発行されるようになったが、諸外国で公表されるものと違うのは、これが最も肝心な点をぼかしていることだ。肝心な点とは言うまでもなく、日本はこの国を敵として、具体的にどのような戦争の準備をしているのかということだ。

「仮想敵」は作らないと言いつつ、極東ソ連軍との全面対決を想定した「PACEX 89」に参加し、「必要最小限度の防衛力」といいながら世界第三位の軍事費を支出するよくな本音と建前の乖離が、近年ますます際立ってきたことがその記述を以前にも増して信用の置けないものにしてている。しかもこのコラムでも指摘してきたように世界は「冷戦構造の解体」へ向けて大きく動きつつある。その中で急速な日本の軍備拡大である。防衛庁の唯一の体系的な「プロバガンダ文書である「防衛白書」の役割はこれまでに大きくかっ

たはずだ。

しかしお役所仕事にそれほど劇的な変化を期待するほうが無理なのか、今年の「白書」の「目玉」は「初めて日本周辺の極東ソ連軍の配備状況を具体的に示した地図」を「掲載に踏み切った」ことだという。しかしその日の夕刊各紙に仰々しく乗せられたこの地図は、その正確さともかくとして、もっと詳しいものが民間でも流通している程度の代物なのである。この程度のもをこれまで「伏せて」いたり、これによってソ連の脅威を国民に説得できると考えるあたり、いかに防衛庁が国民をナメているか解る。

しかし「国際安全保障環境にみられる変化に対応して、防衛支出の削減を求める圧力は全く見られない」(「戦略概観88-89」)とタカ派の英国国際戦略研究所に皮肉られるほどに軍事費の聖域化が進んでいる日本にあって、防衛庁は楽観してはいない。日本のようにアメリカの核戦略に全面的にコミットして

いる国では本物のデタントは直ちに自衛隊の存在意義を奪い取ってしまうからだ。だから今年の「防衛白書」では防衛庁幹部によると「デタントの風潮にたいして実態はそうではない、ことを国民に理解してもらおう」(朝日9・12夕)ことに重点が置かれることになった。これまで漠然と「脅威」を煽り、一般論で日本の「防衛」を語ってきた「防衛白書」もそろそろ具体的な論点に踏み込まざるを得なくなっているわけだ。

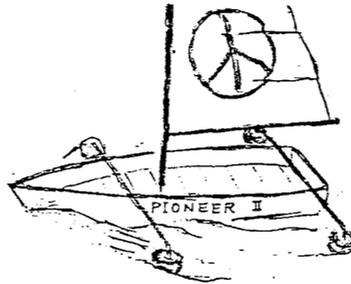
国際的な緊張緩和という防衛庁・自衛隊にとつての「脅威」に加えてもう一つ今度は国内的な「脅威」が加わっている。今秋にもあつりうる衆議院での自民党敗北、連合政権の誕生の可能性だ。9月10日社会党は連合政権に向けた新政策(「土井ビジョン」)を発表し、その中で非核三原則の厳守、日米共同作戦の中止などを主張している。おおざっぱに言えばこの政策は78年の「日米ガイドライン」以来の安保条約からの「逸脱」を元に戻す以上のもではないが、それでも自衛隊にとつては大きなブレーキになることは間違いない。

国際的・国内的な急速な政治的变化が日本の歴史で初めて具体的な「安全保障政策」を論じるチャンスと国民に与えることになった。果たして私達にその準備はできているだろうか？(9・18記)

「燈台もと暗し、とはこのことです。事実基地の街に住んでいながら、そのことを意識しないでいました。というか、生れたときからそれがありませんでした。空気のようなものであったり、その存在に気づきはじめても重大な問題としてとりあげることをおさえつけるような雰囲気、この街にはあるんです。ほんとうにはずかしいことです。」

これは現地舞鶴から参加された若い労働者たちから何度も聞いた話である。僕は、二日間の舞鶴行動の中で、彼らのこの率直な言葉に最も衝撃をうけたのだ。軍事基地を空気の

舞鶴の皆さんへ



8/13~14「日本海を平和の海に! 子供たちに夢と希望を! 舞鶴集会(舞鶴湾戸島)に参加して。



ように日常化させてしまい、いよいよ核兵器まで持ち込もうとする敵の巧妙な宣伝力に驚き怒り、少なくとも今は、それに見事に屈服させられている自分を含めた民衆勢力の弱さがくやしい。聞きのがしてしまったのか、舞鶴の人々の夢をどうしても聞いてみたい。そんな複雑な思いをいだきながら舞鶴をあとにした。

舞鶴のみなさん、どうかこの敵しく困難な状況を乗り越え、将来、基地のない街、子供たちにとって平和で夢のある海がきつと訪れることを信じて、この現実を打ち破る新しい

◆パンフレット紹介

舞鶴は今

対潜水艦ヘリコプター基地建設阻止のために

舞鶴港の再生のために/潜水艦戦争の出撃基地舞鶴/苦悩するまうづる(あゆみ・産業・港・市の方針)/資料/住民インタビュー 500円

編集・発行: トマホーク阻止京都連絡会
TEL075(255)1261

●太田修(京都・反戦ドタバタ会議)

行動をおこされることを願っています。もちろん僕たちも京都の地ががんばります。力を合わせれば、必ず勝利することが出来る、そう思っています。だって、人殺しをする軍隊が海や街を踏みじり、目の前に核ミサイルがせまっているのに、どうして人々が立ち上がらないのでしょうか。

今回の舞鶴行動呼びかけ人の一人、地元で反基地反戦行動をされてこられた蒲田さんが急逝されました。ご冥福をお祈りします。

反核ホット ライン

だより

入港情報

- 89・8・16、19・18
- (9・4) ギターロ(S級) 午前4時 横須賀に入港
 - (9・7) シカゴ(L級) 正午 横須賀に入港
 - (9・9) ギターロ(S級) 午後2時 横須賀を出港
 - (9・15) ポーツマス(L級) 午後2時 横須賀に入港

原潜豆知識①

下の表は、毎回日本にはいつてくる原潜の性能の一覧表です。トマホーク原潜が入港のたびに、ロサンゼルス級、パーミット級などと表記していますが、それぞれどのような性能を持った原潜なのかを示した表です。このような性能を持った原潜が日本の周りをウロウロし、港にも入って来るのです。

ちょっと見ていただけると「あれ」と思われるかも知れませんが、原潜は水中の方が水上より速く走れることです。これは、風波のある外洋では造波抵抗が大きな障害となつて、30ノット(時速約55・5km)の連続走行は容易ではない。そこで、水中の方が水上を走るよりも速い、という現象が生まれるのです。そこで、水上速度が20ノット以上で、水中速度が30ノット以上となるのです。

防衛ハンドブック(1989年版)より

艦種	艦名	隻数	水上排水量(トン)	水中排水量(トン)	水上速度(ノット)	水中速度(ノット)	装備	乗員(人)	備考
SSN	ロサンゼルス(級) (ホノルル等)	38(18)	6,000	6,927	—	30以上	21インチ魚雷発射管×4 (ハーブーン、魚雷) (一部トマホーク、サブブロック)	133	原子力艦 新造艦にトマホーク(VLS)装備
SSN	スタージョン(級) (ホークビル等)	37	3,640	4,640	20以上	30以上	21インチ魚雷発射管×4 (ハーブーン、サブブロック、対潜魚雷) (一部トマホーク)	129~140	原子力艦
SSN	パーミット(級) (ハド一等)	13	3,750/3,800	4,300/4,470	20以上	30以上	21インチ魚雷発射管×4 (サブブロック魚雷) (一部ハーブーン)	127	原子力艦

原子力艦入港情報 テレホンサービス
プッシュホンで、まず 井8301、そして連絡番号 968・1071、次に暗誦番号 1071
クロハ イレナイ

平壤—板門店訪問記

足立修行
トマホーク阻止京都連絡会

七月二十日から二七日まで、朝鮮民主主義人民共和国(以下共和国と記す)で「朝鮮半島の平和と統一のための国際平和大行進」がおこなわれた。この行進は在米韓国人団体が中心となって世界に呼びかけたもので、朝鮮の北端白頭山と南端韓半島から同時に出発して板門店に向かう計画であったが、南の地帯では当局によって実力で阻止された。

民衆の手で朝鮮の平和的統一を実現しようとするこの行進に、第三世界をはじめ世界五大陸三五ヶ国・地域が次々に代表団を結成するなかで、日本では七月に入っても団結の動きが始まっていなかった。私たち(吉田満智子、足立)は、急ぎよ私たちの会の派遣という形で遅ればせの参加を申し出た。たった二人の日本代表である。

しかし、その後の手続きや飛行機の遅れ、さらに北京でのヴィザ取得に二泊を要したこ

ありながら、このような共和国の概観すら伝わってこない。共和国のさまざまな姿を直接見聞きするにつれ、私たちに日常入ってくる共和国に関するマスコミ報道がいかに少なく、さらに一面的であるかを痛感せざるを得なかった。



平和大行進は、三五ヶ国・地域七〇余名の外国代表団のほか在外朝鮮人(日・米・中・ソ・カナダ・ヨーロッパ)百一〇名など総勢四〇〇人で、白頭山を出発したあといたる所で数十万の民衆の歓迎の嵐につつまれた。サリオン、シンチョン(朝鮮戦争で米軍により住民三万五千人が虐殺された街)、ケソン(離散家族が多い)と行進が南下するにつれ、歓迎の熱気はますます高まっていったという。行進には朝鮮戦争に国連軍として参戦した一六ヶ国の代表がすべてそろい、板門店に到着後共同声明を出した。その内容は、朝鮮人民に対する謝罪とともに統一のために闘うことを宣言し、米軍と核兵器の撤去を要求するものであった。

三〇日、私たちはようやくの思いで板門店に入れた。ピョンヤンから一九〇キロ、軍

となどで、私たちがピョンヤンに入れたのは七月二七日であった。せめて行進の板門店到着にだけでも間に合いたいという私たちの願いはかなわなかった。空路にして二時間のピョンヤンに数日かけねばならない現実には、日本のいびつな朝鮮政策が象徴されている。朝鮮の分断のおおもとを作ったのは、日本の三六年前におよぶ侵略支配である。「東亜の解放」「大東亜共栄圏の建設」という身がってな論理で、他国に土足で踏み込み暴虐のかきりを尽くした。その日本は、敗戦後、大団の支配権争いが生み出した朝鮮戦争を「天佑神助」と喝采して軍需景気で復興の足がかりをつかみ、分断後も米戦略にくみして米日韓のゆがんだ体制を支え、朝鮮の統一を妨げつけてきた。



板門店の統一閣で 左から筆者、林さん、吉田、文神父、ダム・スミス氏(米国代表)

事境界線の北側に建つ統一閣で南の全大協代表林秀卿さんとカトリック正義具現全国司祭団代表文奎鉉神父たちに会うことができた。

板門店通過の要求を拒否され、抗議のハンストに入って四日目になっていた。外国代表十名や在外朝鮮青年学生など支援を含めて約七十名のハンスト団だった。全員が私たちの到着を喜んでくれた。分断に最も重い責任を負う日本からたつたふたり遅れてやってきた私たちは、胸をつかれる思いであった。

林さんは生命を賭けて北の地にやってきた。民衆による統一への新たな一ページを切りひ

ピョンヤンに到着した私たちは、二八日午後板門店から帰ってきたばかりの外国代表団と合流することができた。その夜開かれたレセプションには、代表団や在外朝鮮人のほか共和国からも多数出席し、会が進むにつれて堰を切ったようにあがりはじめた「チョソヌンハナダ」「KOREA IS ONE」のシュプレヒコールが、たちまち全体に広がり会場は熱気につつまれた。

私たちはすぐにも林秀卿さんのいる板門店に向かいたかったのだが、そのためには手続が必要であり、林さんの通過要求で軍事緊張のさなかにあることもあって、対外文化協会の孫さんと、さんがとってくれた手続きの許可がおりるのを、いたたまれぬ思いで待つしかなかった。

その間、ピョンヤン市内を見てまわる機会を得、また平和行進の詳しいようを教えてもらうことができた。

ピョンヤンは、水と緑のあふれる整然とした街だった。大同江と普通江がゆったり流れていた所に木々が茂っていた。住宅はほとんど高層で、郊外の光復通りにはここ二年ほど建てられたという二〇〜四〇階のアパートが群立していた。それらの高層住宅には、一階に店が並んでおり、生活必需品がすべてそろっているという。街ゆく人たちの穏やかでやさしい表情が印象的だった。日本は隣国で

らく歴史的役割を自らに課した彼女の行動は、南当局の言う「英雄主義」でも「冒険主義」でもなく、人間としての高い勇氣に支えられている。

「北も南も私の祖国、そこを歩いて帰るのがなぜ罪なのか」。彼女の悲痛な訴えが冷然と圧殺される現実、この現実を作り出し支えているのが私たちの日本である。「朝鮮の統一に日本は大きな役割を果たせる。そのための努力をしてほしい」。彼女は私たちにそう伝えた。

私たちが朝鮮民衆と連帯するとは、統一を阻害する日本のあり方、安保国家日本をつき崩す闘いを進めることであるはずだ。

八月十五日、林さんと文神父は板門店を通り、現在国家保安法で拘留されている。抗議と釈放要請を韓国政府に集中することを訴えて、この報告を終わりたい。

「抗議先」

〒一〇六 東京都港区南麻布一―二―五
韓国大使館気付
盧泰愚大統領あて
TEL〇三(四五二)七六一―



反トマホーク運動 第11回全国会議

時: 11月3日~5日

開催地: 長崎



●スケジュール

3日(金・文化の日)

午後: シンポジウム

「九州の核・基地状況」

夜: 前田哲夫氏講演会

4日(土)

午前: ピースバスで三菱兵器工場巡り

午後~反トマホーク全国会議I(1時開会)

5日(日)

午前: 反トマホーク全国会議II(正午閉会)

会場: 長崎市教育文化会館(長崎市筑後町2-1)

参加費: 約10,000円(2泊+バス代含む)

問い合わせ先: ピースバス長崎 0958(22)4098]

あるいはトマ喰い虫社へ

会計報告

(89.8.9~9.3)

[収入]

○前月からの繰越	△ 63,550
経常繰越	186,450
借入金繰越	△250,000
○今月の収入	139,152
会費収入	113,000
内	
維持団体	20,000
維持個人	24,000
参加団体	0
参加個人	28,000
通信会員	41,000
カンパ収入	21,000
行動収入(PACEX)	1,120
資料収入	4,000
反核ホットライン収入	0
雑収入(銀行利息)	32

[支出]

●今月の支出	136,051
家賃(分室を含む)	50,000
水道光熱費	5,710
電話代	22,484
郵送費	44,527
文具代	0
印刷費	1,190
行動費(PACEX)	10,000
資料経費	0
反核ホットライン経費	0
郵便振替等手数料	2,140
●次月への繰越	△ 60,449
経常繰越	189,551
借入金繰越	△250,000

月刊反トマホーク通信 第四十七号

一九八九年九月二十日発行(通巻四十八号)

*発行 トマホークの配備を許すな! 全国運動

〒一五〇 東京都渋谷区渋谷一丁目五十九

バル青山五〇二 トマ喰い虫社

〇〇三(四九八)六〇九五

〇四四(六三)五一〇一

FAX〇四四(六三)九九〇七

郵便振替 東京六一三六一四八

*編集 反トマホーク通信編集委員会

*定価 一〇〇円(通信会員年間二〇〇円)

求ム! スタッフ、助っ人

- 編集から印刷、発送まで「反トマ通信」はすべて手作りです。ミニコミ作りに興味あるひと、平和運動の新しい情報に触れてみたいひと、イラストやデザインをやってみようかなというひと、とにかく何かやりたい!と思っっているあなた、いっしょにやりませんか?
- 発送も手伝って下さい。毎月20日直後の日曜日、トマ喰い虫社の分室(東横線日吉駅下車044(63)5101)でやります。

次回の子定

10月22日(日) 午後2時から